

T・B・ボットモア著

## 『エリートと社会』

T. B. Bottomore, *Elites and Society*, C. A. Watts & Co. Ltd., London, 1964, 154p.

## I

かわいい、小さな本である。本文142ページで、軽く、薄い。だが、見かけや手に持った感触とは反対に、内容はまことにずしりとした、コクのある本である。なぜそうであるかはあと回しにして、まず本書の構成と内容から始めよう。

七つの章からなる本書は、第1章 エリート——概念とイデオロギー、第2章 支配階級からパワー・エリートへ、第3章 政治とエリートの循環、第4章 知識人、経営者および官僚、第5章 伝統と近代性——開発途上諸国におけるエリート、第6章 民主主義とエリートの複合性、および、第7章 平等化かエリート化か?によって構成されているほか、巻末と文献が8ページにわたって掲載されている。

以下に章別に順を追って紹介しよう。

第1章 エリート——概念とイデオロギー、では「エリート」ということばの源流を求め、ついで歴史的な解釈と定義が述べられている。おもしろいことに——いや、むしろこれはエリートについて浅学なわたくしだけの印象かもしれないが——もともとこのことばは人間に冠されたものではないらしいのである。しかもそれは比較的近代になって普及したことばらしいのである。すなわち著者のいうには“*élite*”という単語は17世紀ごろには、特定のすぐれた商品に対して使われ、それがだんだん広義に使われだして、たとえば、軍功を燦然たらしめた将校団とか、高位の貴族をも指すようになったといわれる。また、1923年刊のオックスフォード英語辞典によれば、この広義の社会的含蓄をもった単語がすでに顔を出している。といっても、このことばが社会学的・政治学的な意味で広くそれらの文献に普及したのは、19世紀もずっと後半にはいったヨーロッパであったといわれる。

「エリート」の定義については、著者は V. Pareto の *The Mind and Society* におけるかれの定義を引用して、その語義の時代的変遷を象徴的に示している。すなわち、パレートによれば、「ちょうど学校で試験の結果履修課目に採点され、生徒の順位が決まるように、社会

のあらゆる分野における人間の営みにも、高低、優劣の差がつけられる。たとえば、もっとも高位のタイプの弁護士には10点満点とつけられ、ろくに訴訟依頼人が寄りつかぬ弁護士には、1点という低い評点しか与えられない。実際あることだが、まともな正業にせよ、あくどいやりかたにせよ、とにかく百万長者になった者には10点をあげよう。数千ポンド財産をつくりあげた奴には、まあ、6点をあげよう。いつまでたってもピイピイで、四畳半の間借りでしか生活できない奴には、せいぜい1点としよう。まあ、このような方法で、人間社会の営みのなかで、各分野の人間階層にはピンからキリまでの指標があり、そのピンのほうをパレト一流に言えば、「エリート」というのである(アダム・スミスやダーウィンの時代においては、これはもっともな話だったかもしれない。もっとも、21世紀もほど近い現代のアメリカや日本の経営者や、中小企業の成上り者のオヤジのなかにも、これと同巧異曲の考え方をするものがいて、苦笑させられるが)。

要するに、パレートの定義は、社会生活のそれぞれの圏内で、能力の個人差というものが生まれつきはっきりしていることをおおげさに強調したにすぎないもので、結局は、「支配者エリート」(governing elite) とはなんであるかの出発点となっていることがわかるのである。

これに対して、G. Mosca はパレートと同じ定義をエリートに与えながらも、強調の角度が違っている。すなわち、パレートにおいては社会階層の仕組みを「支配エリート」と「被支配エリート」に二大別し、芸術家、学者、経営者、商人、軍人、政治家の10点満点の連中をエリートとよんだが、モスカの場合は *political elite* にとくに注目するとともに、「新中流階級」(new middle class) の社会的意義に注目し、これらがいわゆる「準エリート」として「エリート」と相関し、循環するという、動態社会学的な方向を示唆している。かれの定義のなかで、知識階級の存在はこの社会階層の流動の大きな要素とみるのである。

## II

パレートやモスカにページをさきすぎた感があるが、その理由の一つはこれから述べる筆者ボットモアとの相違点をはっきりさせ、そこから、かれ自身の定義を明確にすることにある。ボットモアによれば、前述の *elite(s)* の概念はさらに明確、厳密にされるべきであり、そのためにもっと局限されたターミノロジが必要であると

する。現在一般に使用されているエリートは、機能的 (functional)——主として職分上の (occupational)——グループで、かつ、社会的に高い地位をえたグループという意味で適用される。ポットモア自身もこれをもって無条件に定義として受け入れている。このように定義すると、エリートの研究のために有効である。すなわち、エリートの規模、さまざまなエリートのグループ数、各エリート間の相関性、政治力を行使するエリート・グループとそうでないエリートとの関係を解き明かすことは、社会の型の国別異同を識別し、社会構造の変化を評量するにあたって、必ず考察すべきことがらである。もし「エリート」の一般的意味が機能的グループに適用されるとすれば、ここでさらに、われわれは、社会を支配し、かつ、機能的グループでないところの一特定集団にも、もう一つの語義を与える必要がある。それはモスカの解釈を借りて、“political class”と呼ぶことにしよう。この階級とは政治力ないし政治的影響力を行使し、かつ、直接に政治のリーダーシップの闘争に明けくれているすべてのグループをさしている。著者は、この階級のうち、ある一定の期間に実際に政治力を行使する特定の個人からなる政治エリートたる、より小さなグループを、この political class から区別している。

民主主義との関連におけるエリートの立場をポットモアはいかに考えるか。両者は対立概念なのか、両立するのか。かれは、対立概念についてつぎの2形態を指摘する。第1に、個人間の生来の資質が不平等であるとするエリート理論の主張は民主主義的政治思想の根本的理念に反する。つまり、この民主政治思想は人間の資質はもともと等しいという前提に立っている。第2に、少数支配の理念は、大多数支配の民主主義理論と矛盾する。かれはいう。それにしても、この相反性は、その語義ほどにはきびしく、極端であるべきはずがない。すなわち、かりに民主主義が第一義的に政治体制にある、とするならば、多くの人びとが論じていることだが、「人民による政治」(government by the people)——すなわち、大多数による効果的支配——は実際には不可能であり、また政治的民主主義の意味は、主として、社会における権力の地位が原則としてすべての個人に開放され、権力の所有者がつねに選挙民に責任を負うことにある。シュンペーターによれば(J. A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*)、民主主義的方法を、「人民の投票を得るための競争的闘争という手段によって個人の集団が決定の力を獲得できるような、政治的決定到達のた

めの制度的取決め」と定義しており、これはこんにち広く認められているところである。

前述の古典的な「エリート」の解釈と実態のスケッチののち、第4章の知識人、経営者および官僚においては、現実的な取組みかたと解釈へと転じている。また国際的な新しい傾向として、第5章の伝統と近代性のなかにくに低開発諸国の特性が述べられ、エリートの問題がこれほどクローズ・アップされたことはないとしている。20世紀のこんにち、知識人、経営者および官僚の3グループは、はげしい社会的、政治的変化の主要な担い手エリート(もちろんこれら3グループの上層にいる人びとを指す)である。もともとこの3グループのエリートとしての台頭は、マルクス理論をきっかけとして生まれている。つまり、マルクスは、近代のヨーロッパ史上もっとも顕著な事実は新社会勢力たる労働者階級の勃興であるという。これに対して、反マルクス主義者は、3グループの台頭こそもっとも重要な歴史的事実であるとしてこれに反駁し、同時に、資本主義の転型はエリートの「階級なき」(“classless”)補充へと向かう(すなわち多かれ少なかれ、威信と権力のさまざまなレベルの間で個々人の完全な循環がおこる)が、他方、支配のエリートと大衆との間の区分は現実には保持される(つまり階級なき社会へは導かない)というのである。

ポットモアは社会主義圏と西欧社会におけるこれら3大エリートの存否、性格を比較検討している。もっともソ連についてもこれら三つのタイプのエリートの発生が皆無ではないことを、スターリンからフルシチョフの時代的変遷のなかで述べている。それでもこの点の叙述は億測の域を出ない感じである。

### III

第5章の伝統と近代性のもっぱら低開発国に関連して述べられている。ただし、エリート論がもっとも鋭いがたちでたかかわされるのは、根強い伝統ないし因襲の基盤のうえで急激に近代化を進めようとする社会についてである。それは、社会構造の変化とエリートの盛衰交替の間には、密接な関連があるからにほかならない。このことは、過去100年の間に明治維新当時の士農工商という日本の社会的身分構造の序列および各階層の比重がいかに変化してこんにちに至ったかをみてもわかることである。こんにちの日本で「経営者」がエリートとしての地歩を築いている点では、ポットモアの規定する西欧社会の3大エリートの一つとしての経営者となん

ら矛盾するものではない。これは私見であるが、他のアジア諸国——社会主義圏以外の——においては、entrepreneurship ないし経営者階級は、いまだに社会のエリート集団として明確な基盤を持っていないのみか、一般には、産業主体としての集团的・社会的存在も認めがたい状態にあるといつてよからう。

ボットモアは低開発地域一般についてのエリート論を展開するまえに、低開発国の特徴を地域によって4大別する。第1にアフリカ諸国で、外国の徹底した政治支配下にかつて置かれ、自らの闘争によって独立し、経済開発ばかりでなく、部族統一が統一国家形成上重要とされる地域、第2に中近東および北アフリカのアラブ諸国で一部は直接的な植民政治と闘って独立したが、大部分は独立国としてかなりの年月を経ているか、もしくはかつて間接統治下にあり、封建性ないし独裁制の打破に政治の重点がおかれ、極端な不平等とリジッドな階級制下にある地域、第3はアジア諸国で、その大半が古代文明の歴史を背負い、伝統的な社会制度が深く根をおろしており、大半が植民支配から脱却して間もない国々でありかつ、アフリカの部族ほどの国家統一の悩みはないが、言語や宗教が多元的な点ではアフリカと同じ悩みを持つ地域、さらに、第4として、ラテン・アメリカがあるが、これは前三者とは多くの点で異なっていること、とくに経済的により進んでおり、農業社会というよりは都市社会であること、比較的長い独立国としての歴史を有し、したがって国家統一が進展していること、北アメリカの経済的圧力に対する反発はあっても、他の3地域ほどの強烈なナショナリズムがない、など。さらにもっと重要なのは、この地域では言語や宗教がほぼ同一であることである。

ここで Clark Kerr その他の共著になる *Industrialism and Industrial Man* のなかの “The Industrializing Elites and their Strategies” における、低開発国の一般的なエリートの五つのパターン、すなわち、(1)王朝エリート、(2)中産階級、(3)革命的インテリ、(4)植民行政官、および(5)ナショナリスト・リーダー、の分類が採用され、著者は最後の3パターンこそこんにちの低開発国のエリートの主要形成グループとみるのである。

これら3グループのうち、もっとも支配的なエリートの役割——したがって国の政治のリーダーシップをとる役割——を担うものはだれか？ 著者はこの問いに対しては一般的な解答を与えていないようである。それは国により、地域によって大きく異なるからであろう。現実

には、革命的インテリ、国家主義的な政治指導者および将校がリーダーシップの闘争を続け、これに政府の上中層官僚やビジネスマンが加わるか、もしくは独自の動きを示す、といった具合である。これらグループの思想的・経済的・社会的基盤はなにか、またかれらの行動の精神的よりどころはなにか——たとえばインドの一部のインテリのようにイギリス文化べったりか、あるいはガンジーおよびかれの後継者のようなインドの土壌から育った哲学なのか——あるいは多くの国で伸長しつつある共産党指導者をエリートとみる場合、その役割と他のエリート・グループとの関係はどうか、など、限られた本稿のスペースでは本書の概要すら、うまくまとめられそうもない。前記の5大分類はごくおおまかなものであって、各エリート・グループ間に、截然たる境界線があるわけではない。またそれが必ずしも対抗したり闘争しているのではない。真実の姿は、競争、敵対、妥協、をグループ間であるいはグループ内で繰り返す、しかも必ずしも利害ないしイデオロギーが自己統一性を持っているわけではない、といったところであろう。

端的にいって、本書は、多くの文献を体系的に引用、例証している点で、いうなれば「エリート学説史」ともいえるし、「エリート学入門」ともいえよう。とくに複雑な低開発国のエリートの問題を西欧資本主義の価値概念に捉われず、共産主義、民族主義、旧宗主国扶植による指導者の理念と経済的利害を簡明にしてフェアに論じたところなど、matured scholar という感を強く与える。

最近本書翻訳本が出たと聞いているが、本書は政治、経済、社会のからみ合いを巧みに叙述——分析でなく——した点で、政治学に暗い経済学徒、経済学に弱い政治学徒、社会学徒に一読を奨めたい良書である。

付記 本稿脱稿後に訳本が出版されたので以下に紹介しておきたい。綿貫譲治訳、『エリートと社会』、岩波書店、昭和40年7月30日、188ページ。

(調査研究部 崎山昭治)